

## メッセージアウトライン

### ガラテヤ 4：12~20 「私 は 再 び 」

パウロは人が神の前に義と認められるのは律法の行ないによってではなく、キリストを信じる信仰によるということを契約、養育係、相続人などを例にとり語り続けてきた。そして今、彼はもう理屈ではなく、自分の全存在をぶつけてガラテヤ人のために語る。

「お願いします。兄弟たち。私のようになってください」(12) これは信仰によって神の前に義とされ、律法から自由にされた自分のようになってほしいとのパウロの心からの願いである。「私もあなたがたのようになった」これはユダヤ人としての特権や習慣を捨て、異邦人であるあなたがたと同じようになったという意味。

「私の肉体が弱かった」(13)これはたぶん彼がこの時、熱病の一種であるマラリヤにかかっていたのではないかと考えられる。彼はこの病気が回復するまで長期滞在することとなり、その間にガラテヤ人に福音をじっくり宣べ伝えることができたのだろう。健康であってもなくても大切なことは、神の恵みに生かされ、信じる者に与えられている御霊により頼んで福音を伝えること。この時ガラテヤの人々は非常に好意的であった。(14)

「それなのに、あなたがたのあの喜びは、今どこにあるのですか」(15) 彼らは非常に感激したため、もしできれば自分の目をえぐり出してパウロに与えたいほどだった。それなのにどうしてなのか。

「あの人たち」(17)とはにせ教師たちのこと。ガラテヤ人たちは彼らの教えに惑わされた。どんなにすばらしい感激や感動を経験しても十字架の福音に堅く立っていなければ悪魔の巧みな誘惑に負けてしまう。私たちの避け所はただ十字架にのみあることを覚えておかなければならない。

「良いこと」(18) 福音の真理に忠実であること。福音の真理に忠実であるがゆえに、人々から熱心に慕われるのは良いものである。しかし偽教師たちの誤った教えによってガラテヤ人たちが熱心になるのはパウロはとうてい許すことはできない。「私の子どもたちよ。あなたがたのうちにキリストが形造られるまで、私は再びあなたがたのために産みの苦しみをしています」(19) パウロがどんなに深くガラテヤ教会の人々を愛していたかということはこのことばでよくわかる。それなのに今やガラテヤの教会は成長どころか突然死を起こしそうなのである。それでパウロは産み直すためにもう一度産みの苦しみをしていると言う。彼らを本当の信仰者、本当のクリスチャンにするための苦しみである。イエス・キリストを救い主と信じた人のうちにキリストが形造られていくのは一朝一夕のことではない。そこには多くの労苦と忍耐と祈りと犠牲が必要とされる。決して口先や小手先でできることではない。全存在をかけなければできない重い仕事である。しかしまた光栄ある尊い働きでもある。「あなたがたのことをどうしたらよいか困っているのです」(20) 私たちはこのパウロの姿にイエス・キリストの姿も見るのではないだろうか。私たちは神の愛とイエス・キリストの十字架の血と贖いを無駄にしてはならない。